

＊ ＊ 広町の森・植物だより ＊ ＊

#16 蝶よ花よ

2007年5月

鎌倉市七里ガ浜・角田紀之

- * 今回は花と蝶の写真を楽しんでください。広町を植物観察やパトロール活動で回っていると、時に蝶が羽を休めたり、蜜を吸っているのに偶然に出会います。“蝶よ花よと大事に育てる”と言い習わしたりするほど優雅の代表みたいな光景でいつも“はっと”します。勿論思わずカメラを向けることとなります。これらの写真は（5枚）みなそうして撮られたもの、つまり偶然の産物です。いわば彼ら彼女らの食事中や休息中や時にはお産の最中を第三者がことわりなしに写真に収めていることにもなります。最近うるさい肖像権とかプライバシー権とか居住権とか、浮世の面倒くさい？ルールを考えずにいられるのも自然観察の爽快さのひとつです。体にいい。今回は誰にも心地よく見ていただけるものと確信します。

(1) ハルジオンの花とベニシジミ（蝶）



御所が谷 4月

(2) チダケサシの花とベニシジミ (蝶)



畑の南西斜面、通称“植物観察路” ’ 06年7月

- * チョウとガは同じ仲間で(鱗翅目=りんしもく)全世界に約**17万種**いるといわれる昆虫グループです。両者の区別は便宜的なもので画然とは区別できないといえます。つまり分類の境目がはっきりしないのです。
- * ヤマケイのポケットガイド「チョウ・ガ」(2006年9月刊)によると、チョウは世界中に約**17600種**いて、そのうち日本には約**250種**がいるそうです。神奈川県内では約**120種**が見つかっているといえます(神奈川県生命の星地球博物館編、「昆虫」、2000年3月初版)。もっともこの数は新種発見で毎年かなり増えているらしいのです。
- * それにしても花と蝶とはなんと絶妙なコンビですね。“食草”(しょくそう)とか“食樹”という言葉があります。それぞれの蝶によって好みの植物があるのです。成虫の自分の食事のためだけでなく、幼虫の食事になる植物も大方決まっていますので、卵を産むときはその植物を探すわけです。例えばアゲハチョウの仲間はミカン科やケシ科の植物などを好み、シロチョウの仲間はアブラナ科やマメ科の植物などを好む等々です。蝶と植物とは密接な関係にあるわけです。

(3) ミズキの葉で休む ミスジ (蝶)



*オオミスジとコムスジがある。

竹が谷 8月

(4) チダケサシとツバメシジミ (蝶)



15ミリほどでごく小さい 畑の南西、通称“植物観察路”06年7月

- * 市民協議会の仲間と広町パトロールをしていると（平日午前ですが）、いろいろな光景に出会います。今まさに“蝶よ花よ”と大切に育てられている、**3歳児、4歳児**のグループにもよく出会います。これは嬉しいですね。小さい子供たちはかなりの坂道でも驚くほど達者な動きで、大人よりずっと安定している歩きに感心します。おそらく身軽なことと重心がずっと低いからでしょうか。
- * また大昔に蝶や花よと育てられたに違いない“元少女”たちにもよく出会います。足だけでなく口の運動も一緒に効率よくしていることが多いです。彼女たちは春にはよくセリ摘みをしています。もちろん、わたしと同様とつくに“賞味期限”切れの“大昔少年”にも出会います。彼らは単独が多く、たいてい黙々と歩いています。

(5) トウネズミモチの花とオナガアゲハ（蝶）



ウルシ林のすぐ南 ‘06年7月
(蝶は自然観察の会・原田氏の判定による)

- * 花や蝶は昔から自然界でもっとも美しいもののひとつとして親しまれ、文学や美術にもよく登場します。以下ちょっと無駄話**3**題で終えます。

- * “チョウチョウ”と聞いて誰でも思い出すのは、あの小学唱歌ではないでしょうか。これを機会に調べてみたら、作詞：野村秋足（あきたり）、原曲はスペインの民謡（舟歌）で、明治 14 年（1881 年）に小学唱歌集に掲載されたとのこと。これがまさに唱歌の始まりで、また日本における西洋音楽の始まりといってもいいそうです。

“ちょうちょう ちょうちょう 菜の葉にとまれ
菜の葉に飽いたら 桜にとまれ
桜の花の 花から花へ
とまれよあそべ あそべよとまれ “

というのですが、“昔少年”としてはちょっと首をかしげる点もあるのです。蝶は菜の花に止まっているのはよく見るように思いますが、そんなに葉っぱに止まりますかね。菜とは何をさすのかよくわかりません。それから桜の花の花から花へ、蝶が舞っているのもほとんど見ないように思います。

（自然観察委員会の影響で？理屈っぽくなったか？）誰か教えてください。

- * 中国の思想家・荘子の思想を表す代表的な説話として胡蝶の夢（こちょうのゆめ）というのがあります。「莊周（＝莊子＝道教の始祖）が夢を見て蝶になり、蝶として大いに楽しんだ所、夢が覚める。果たして莊周が夢を見て蝶になったのか、あるいは蝶が夢を見て莊周になっているのか。どちらともわからぬ、どちらでもかまわない。」（以上は PC 検索サイト：Wikipedia の「胡蝶の夢」の引用）。荘子は徹底して「無為自然」を尊んだといえます。これは自分という存在と蝶とはつながっており実は境界線はないといっているのだと、私なりに理解しました。

- * 高校時代だと思いますが、国語の古文の時間に「堤中納言物語」（つつみちゆうなごん物語）というのがあり、その中に「虫愛ずる（めずる）姫君」という変わった話が出てきて面白かったので未だに覚えているのです。「人々の花や蝶やとめずるこそはかなくあやしけれ」といって、幼虫つまり“毛虫”をかわいがる風変わった姫君がいたということです。一日中昆虫を見て飽きなかったらしいあのフランスのフェアブルの日本版みたいな少女が日本の古典の中に出てくるとは驚きです。いつの世も“蓼（たで）食う虫も好き好き”ですね。

（終わり）